瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 5
瑠璃集 …… 10
瑪瑙集 …… 19
紅玉集 …… 22
俳誌交歓 …… 23
光耀抄月評 …… 24
総合誌の窓 …… 26
恵贈俳誌拝見 …… 28
恵贈句集拝見 …… 30
琥珀集作品鑑賞 …… 31
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 32
Ⅱ …… 33
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 34
作品鑑賞文を書かせていただいて …… 35
義兄の死 …… 36
「着せ綿」 …… 38
俳句と盆栽と …… 39
能登名舟祭吟行Ⅱ …… 40

2008/11　第32号

今月の一句

白樺を幽かに霧のゆく音か　水原　秋桜子

明治二十五年生まれ、昭和五十六年没。目の前を流れている霧を見つめる作者。薄明の世界に浮ぶ白樺林、耳をそば立てると幽かな音がきこえる。「音か」と問いかけをしているが、作者はたしかに霧の音として感動をもって聞き入っている。調べのよさは他の追随を許さない。

塩路　隆子

越前妙陶房

塩路隆子

新涼や先づは越前おろし蕎麦

土捏ねの無心を囃す昼の虫

手に馴染む土の感触小鳥来る

爽やかに伸びる陶土や匠の手

二代目の薪割る音や秋日和

星月夜越前の温泉(ゆ)に身をほぐし

夜の餐に寄り来る守宮放ちけり

土捏ねし余韻の不眠木の葉木菟

PDF= 俳誌の salon

十一月号光耀抄

塩路　隆子選

折り畳むベビーカーより木の実かな　鈴木　照子
龍淵に潜みてゲリラ豪雨呼ぶ　北尾　章郎
建て替へし家にふたたびちちろ虫　竹内　悦子
鮑漁待ちたる磯の番屋かな　坂上　香菜
志野壷に風活けてあり秋桜　小澤　菜美
介護にも賜はる休暇赤とんぼ　宮崎左智子
障子貼る芭蕉生家の明り窓　田下　宮子
秋気澄む堂の静謐四天王　笠井　清佑
別荘はノベルの中や秋浅く　森下　康子
山鳩の一気に飛翔真葛原　宮田　　香
黒べこの遊ぶ高原秋旱　増田　一代
黄昏の一樹占めたり椋の群　三川美代子
爽やかや高野宿坊ごま豆腐　西田　史郎
大浦に仰ぐ尖塔いわし雲　藤見佳楠子
気楽さの中の孤独や法師蝉　杉本　　綾

PDF= 俳誌の salon

子へ送る三年坂の唐辛子　中川すみ子
花木槿門に魔除けの笑顔かな　坂根　宏子
数珠まはし嬰が主役の地蔵盆　紀川　和子
浜の秋魚網繕ふ老だまり　山口キミコ
山門に忘れられたる捕虫網　山岸　邦
向日葵やゴッホの黄色探す旅　池田加寿子
天空を裂く一瞬の稲つるび　和田　郁子
水源の森百選や秋の風　松田和子
商ひの神浄めけり今朝の秋　伊東　和子
夏野菜これでおしまひラタトウユ　安本　恵子
不寝番の守宮にゆだねひと夜旅　伊藤　洋子
哲学者めく枯蟷螂父臥せり　山崎　里美
秋霖に川音高き流れ橋　山本　孝夫
意に染はぬことの多しやレモン切る　吉田　晴子
駈け足の美脚サンダル発車ベル　前川ユキ子
かなかなに追はるる心地宮を辞す　松田とよ子
酔芙蓉路地の棋戦の終りけり　永船みどり
秋蝶の気息伝はる湖辺かな　森永　洋子
稲穂なほ青き一画風そよぎ　長濱　順子

PDF= 俳誌の salon

宇宙人ひらりと跳びぬ夏五輪　新実　貞子
濁り酒女性蔑視の村に住み　能勢　栄子
群れ鳥の伸縮自在秋の雲　塩路　五郎
無花果の乳臭き香に噎びけり　杉野原弘幸
シャッターの下りし店舗や仏桑花　桂　敦子
かくれんぼ秋桜揺れて「もういいよ」　北村　美幸
亡夫在らば米寿なりけりまくわ食む　駒井　のぶ
高原に映える赤き実ななかまど　飯田美千子
望の夜を大宮びとになりすまし　井口　淳子
貪欲な血への執着名残の蚊　伊庭　玲子
物忘れ残暑の所為にしてしまふ　大島みよし
朝顔の一輪溝口健二の碑　笹田　浩朗
茄子の実や思ひ出させる祖母の言　齋藤　徳男
雷鳴の加はる夜店早終ひ　竹内喜代子
行水を知らぬ世代のシャワーかな　稲田　和子
朝寝せる嫁のゐぬ間の気のゆるび　奥村佐栄子
ソフトボールあせかいちゃったつかれたよ　塩路　彩奈
秋になりあさがおたちがかれてゆく　広瀬　結麻
秋雨を走りぬけるぞゴーカート　高野　綸

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

猫も積み　鈴木　照子

引越の荷に猫も積み秋うらら
子蟷螂人工芝へ罷り出づ
夫婦してメタボ予備軍秋刀魚焼く
講習は先づ秋鯵の捌き方
折り畳むベビーカーより木の実かな
爽やかや鳴門の茶屋の渦絵皿
秋草を活けてオープンハウスかな

龍淵に　北尾　章郎

噴水の秀に手を差せば嬲らるる
動員令出しかに忙し蟻の列
秋灯プロポーションの佳き菩薩
休み田の草を刈る音空しかり
視線合ふ幽霊画幅堂涼し
「何方(どちら)から」とボックスシート旅さやか
龍淵に潜みてゲリラ豪雨呼ぶ

虫時雨　竹内　悦子

建て替へし家にふたたびちちろ虫
紅芙蓉理想を捨てぬこころざし
口遅き三才児なり虫時雨
つれづれに「寂聴源氏」長き夜
オリンピック果ててかなかな聞く夕餉
世界平和なほなほ遠し葉月尽
碇星妣と思ひて交信す

PDF= 俳誌の salon

積丹路

坂上　香菜

蝦夷富士の美しき全容秋日濃し
函館の奉行所跡や桐は実に
鰊群来とは幻よ秋鴎
カラフルな屋根のコタンや秋天下
ロール積み牛を放牧秋桜
鮑漁待ちたる磯の番屋かな
紺碧の海澄みにけり積丹路

豊の秋

田下　宮子

障子貼る芭蕉生家の明り窓
秋深し蓑虫庵の煙草盆
俳聖の生れし里なり豊の秋
冷まじや鎖帷子錆色に
十五夜の献立翁の崩し文字（芭蕉生家）
背負はれし子供忍者や秋あかね
秋うらら白鳳城の小ぶりなる（伊賀上野城）

コスモスに逢ひに

小澤　菜美

秋の田のグラデーションに立ちつくす
コスモスに逢ひに行きます独り旅
青北風や塔簷深き法隆寺（法隆寺二句）
塔九輪数へつつ無我雁渡し
志野壷に風活けてあり秋桜
松虫に酔ひはかどらぬ友へ文
アレンジのヒップホップや敬老日

鳳仙花

宮崎左智子

介護にも賜る休暇赤とんぼ
嬰の名は桃子なりけり秋うらら
鶺鴒の罪なき石を百叩き
瓜ひとつ拗ねたる如し生り終ひ
「わたくし」に触らないでよ鳳仙花
秋祭りに賜ふ播州くされ鮨
新米の炊き上りけり穴あまた

PDF= 俳誌の salon

秋気澄む

笠井　清佑

高原を画す方形蕎麦畑
高原に風筋見ゆる蕎麦の花
秋気澄む堂の静謐四天王
戒壇の香煙微か秋日和
踊り子のマグマ爆けし夏祭
踊り子の満面の笑み古都の宵
夏惜しむバサラ踊りの娘連

軽井沢

森下　康子

軽井沢はフレンチメッカ秋燈し
木洩れ陽の中の散策栗拾ひ
峠路をサイクリングやきのこ飯
溶岩のアートおどろし秋の雷（鬼押し出し園）
別荘はノベルの中や秋浅く（堀辰雄「美しい村」）
今生の別離切なや法師蝉
代官山秋のモードの溢れをり

祖父の風鈴

宮田　香

流燈の終り火刹那燃え立ちぬ
山鳩の一気に飛翔真葛原
灯のきらりビアガーデンを風抜ける
おしろいの咲いて終りぬ畑仕事
罅割れし大地の悲鳴大旱
風鈴や祖父の遺せる古き音
我が心なほ反抗期鳳仙花

初秋

増田　一代

青空にりんご色づく東北路
果てしなき越後平野や豊の秋
秋空に異常発生雲厚き
黒べこの遊ぶ高原秋旱
白銀の芒の原にゲリラ雨
秋に入り美食気がかりメタボです
今朝の秋青春の日の巨匠逝く（ソルジェニーツェン）

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

稲妻

和田森早苗

江戸風鈴の音色愛しや雨兆し
包丁の切目清しや新豆腐
帰省子に母のカレーの甘さかな
稲妻の一過マネキンたじろがず
写経する影青白き夜長かな

雨の粒

山岸　邦

山門に忘れられたる捕虫網
芋の葉をまろびまろびて雨の粒
雨霽れて朝の光の秋めきぬ
掌で賽の目に切る新豆腐
白萩をさゆらせる風快き

百日紅

池田加寿子

颯々の近江観音百日紅
古稀仲間集ひし銀座遠花火
新涼や欅山門婆々三人
太陽の子てふトマトの完熟し
向日葵やゴッホの黄色探す旅

西瓜前線

和田　郁子

秋の蚊の集まる早さ疎ましき
天空を裂く一瞬の稲つるび
故郷の香をのせ届く水蜜桃
西瓜にも前線のあり食べ納め
接写にも堂々として黒揚羽

百日紅

松田　和子

秋澄むや樹齢千年杉並木
水源の森百選や秋の風
浮文字の水占ひや風涼し
ひとり湯の五右衛門風呂や百日紅
朗読の源氏の恋や観月会

PDF= 俳誌の salon

光耀抄十一月月評

塩路　隆子

折り畳むベビーカーより木の実かな　　鈴木　照子

最近は赤ん坊をおんぶする姿は殆んどみかけない。乳母車も手軽な折り畳み式の軽量のベビーカーをよく見かける。作者は以前に木の実で遊びながらベビーカーでお散歩でもしておられたのであろう。折り畳んだときに木の実がころり落ちたという。「あれー何時の木の実なんだろう」など首を傾ける姿が浮かぶ。雰囲気のある、しかも現代的な良い作品である。

龍淵に潜みてゲリラ豪雨かな　　北尾　章郎

「龍淵に潜む」は秋の時候、秋分の頃を言う。これは中国後漢の字典に「龍は春分にして天に登り、秋分にして淵に潜む」に肖った想像上の季語である。山本健吉により「龍天に登る」と「龍淵に潜む」と春・秋の二つの季語に独立させたとされている。秋の深く澄んだ水は龍が住んでいるような神秘的な印象がある。作者はゲリラ豪雨がこの淵に潜む龍の仕業と断定された。俳句は断定が必要。いい句に仕上がっている。

建て替へし家にふたたびちちろ虫　　竹内　悦子

作者は去年に家を建て替えられた。ご先代から受け継がれた建物に耐震設備を施し、頑丈な棲家として、建て替え大工事をされた。新しい家に越されてから、初めて虫の声を聞かれた作者は感慨無量のものを感じられたにちがいない。「家にふたたび」がそれを物語っている。虫たちも再びこの家に住み着き秋を謳歌している。ご先祖の霊も同じ、再びこの家の守護神として、家内安全・円満をお守りしてくださることでしょう。読者にも伝わる感動である。

鮑漁待ちたる磯の番屋かな　　坂上　香菜

鮑は海女が海底に潜って漁獲する場合が多い。伊勢の海女たちの鮑漁は有名であるが、この句は北海道の句、恐らく海女でなく、海士（男の漁師）によって漁獲されるのであろう。磯に建つ番屋を見られた作者は、番屋そのものが鮑の漁期を待ち構えていると思われた。番屋にはそれを待つ装具や道具、また沈むための錘なども保管されているのであろう。臨場感の伝わる句である。

志野壷に風活けてあり秋桜　　小澤　菜美

美濃の志野焼は、白釉を厚く施して下に簡単な文様を

PDF= 俳誌の salon

描いた絵志野と、ねずみ色をした鼠志野がある。その志野の壷にコスモスを活けられた。コスモスは風に敏感である。この句のいいところ「風活けてある」に注目した。この措辞は本当に風を活けてあるのではなくて「風もろともに」の省略である。中七が非凡な表現で、追随を許さない作品である。

山門に忘れられたる捕虫網　　山岸　邦

「山門に捕虫網が忘れられている」ただそれだけのことしか言っていない。簡単明瞭、意味明白。易しい言葉で、しかも奥深いことを十七文字で表現出来ることが俳句の基本である。この句、蝉や虫のいる森、古いお寺の山門、今まで此処で遊んでいた子供たち、網を忘れた子供は困っているのではないだろうか等々、描かぬ世界が無限にひろがる。見逃せない良い句である。

濁り酒女性蔑視の村に住み　　能勢　栄子

作者は近年ご主人を亡くされた。未だにその悲しみを深くしている句を拝見することが多い。女一人になって思われることは、世間の「女性蔑視」の壁であろう。田舎であればなおさら男女差別の強さは残っている。挫けてはいけないと自分に言い聞かせているものの、寂しさは時としてやってくる。それをまぎらせる姿を「濁り酒」のみで表現、効果的である。頑張っていただきたい。

朝顔の一輪溝口健二の碑　　笹田　浩朗

戦後の映画界を支えた監督のひとりに溝口健二がいる。「残菊物語」「西鶴一代女」特に「雨月物語」「山椒大夫」は連続ベネチア映画祭で受賞した作品である。様々な女性の運命を冷徹に描いた名匠として知られている。作者は京都満願寺にある記念碑を訪れられたのであろう。そこには朝顔が一輪咲いていたという。女性の持つ業を描いた監督の碑に一輪の朝顔が印象的だったに違いない。カメラを長回しする技法によっても有名な監督であればこの光景をどんな技法で撮られたか。いいワンカットシーンを切り取られた。

朝寝せる嫁のゐぬ間の気のゆるび　　奥村佐栄子

年齢をかさねると気分的には感じなくても、体がいうことを利かない場合が多い。作者も気を遣っているとは思わないのに、珍しく朝寝をしてしまったのは、嫁のいない気のゆるみだったのかなと、自分の朝寝を肯定しておられる楽しい句である。

PDF= 俳誌の salon